

<翻 訳>

ジョン・バトラー・イエイツ

〔著〕

『アイルランドとアメリカからのエッセイ』

日 下 隆 平 訳
藤 居 亜矢子

この世に生をうけたものの、人間ほど不思議に思えるものはない。'

(テレンティウス)

推賞——ジョン・イエイツの魅力

成し遂げたことで讃えられる人もいれば、その人間的魅力ゆえに讃えられる人もいる。私は、芸術家としてのジョン・イエイツ氏を誰よりも、高く評価している。だが、天が彼に与えた最高の贈り物とは、人と楽しんで交わる人間性だと思う。芸術家といえども、出会った人、或いは、自分の絵のモデル全員に関心を持つのは容易なことではないだろう。イエイツ氏の手による肖像画はすべて、男女を問わず、彼の愛情が添えられて描かれているように思える。モデルが誰であろうと、きわめて見事に描いた。若者、或いは、老人を描こうと、彼の肖像画にはすべて、その眼差しを通して語りかけてくる魂のようなものがあつた。そのせいか、彼の手による肖像画を見た後では、私は、以前よりもその人物に好感を抱くようになったのである。最初に彼の絵を見ていなければ、きっと、その人物をここまで好きになることはなかっただろう。すでにその一部が出版されている、彼の愉快な手紙やエッセイを読むと、肖像画のモデルに対してイエイツ氏が心中ひそかに感じていたこと

が何となく伝わってくるのである。彼はいつもモデルとその人物の心とを別のものとして描き、好ましい自然のままの生き方を彼らに求めている。本書のエッセイのひとつで、彼の賞賛するアメリカ女性たちが自然のままであるのは容易ではない、と残念そうに述べている。理想の娘、理想の妻、理想の友人となるには、飾り気のない、月並な人間性をもつだけでは十分とは言えないのである。おそらく、イエイツ氏は老子を知らなかっただろう。（この知恵の泉が何と人々に知られていないことか。）だが、思うに、形而上学者、経済学者、理論家のいずれの枠にも収まることのないイエイツ氏であればこそ、「あるがままであれ」という教えから、或る思想を生み出した中国の賢人を好んだことだろう。他の宗教はたいがい、家庭の温もりや愛情から我々を遠ざけ、厳しい戒律で縛りつけるものだ。ところが、老子だけは、改革には終りが無いことを知るが故に、宗教指導者の中でただひとり、世直しをする者のことを聞くと、ため息をつくのである。理想国家では、人は自分自身に満足し、粗末な服でも美しく、質素な食事でも旨いと感じるものだ、と老子は語った。その教えは、イエイツ氏の思想を想起させ、改革を重ねるとアイルランド農民が地上から居なくなるのでは、という彼の不安を思い出させる。イエイツ氏は、生をあるがままに楽しんでた。そのままの状態で、素朴で、心打つものを、何故に変えようとするのか。自然のままとは、その価値が損なわれていないことである。イエイツ氏が絵画や手紙など、随所で探し求めたのは、顔や精神をしぜんに形作る輪郭や感情であったように思える。オーペン氏²の精巧な筆遣いと、ジョン氏の名匠を思わせるデッサンには、たしかに驚かされる。だが、イエイツ氏が描いた女性の顔を見て魅了されるのは、斬新な手法に対する一時の興味からでなく、昔から受け継がれてきた美ともいえる女性らしさが、その表情、眼差し、唇に申し分なく描き出されているからだ。その優しい眼差しを見ていると、太古の時代から、母や妻たちは自分の周りに家庭や文明という避難所を作るために、そのような眼差しで子どもたちに相対し、男たちを魅了してきたのではないかと思ってしまう。イエイツ氏は、絵の中で自分の心が何を表現したいのかをよく知っていた。

それは、芸術を単なる美人画へ貶めた者たちが考えるような表面的な美ではなく、精神美を生み出すものであった。また、彼を知る者なら、人を魅了する話術が、モデルの負担をどれほど軽くしたかを思い出すだろう。芸術家とは、制作に没頭する余り、いつまでも作品に満足しない者であることから、天は有り難いことに、(モデルが退屈しないように、)話術の才と肖像画家の才との両方を与えてくれたのだ。魂の新たな輝きをつねに追いつけ、より自然で適切と感じる表現を見つけると、それまで美しいとしていたものを消し、新たな表現に変えるような芸術家と一緒にいると、モデルは、彼に魅力的な話術でもなければ、とうてい最後まで辛抱することができなかっただろう。イエイツ氏を知る者は、このエッセイを読むと彼の話に賛同しなくても、読む者の心をいつも刺激し、知らぬ間に私たちをおのずから思索に向かわせる、あの話し振りを思い出すことだろう。この時、読者は彼の深い思想を見いだすことだろう。ただ、それはうっかりすると深い意味を見落とすほど、何気なく語られるであろう。また、人を楽しませる彼の愚行さえ、陽気且つ愉快に語られるため、何某か真理の輝きをもつと思えてくるほどである。おそらく、こうした空想や気まぐれな判断であっても、本当らしく思われるであろう。自然の創り出した最も愉快なもののひとつは、自分の尻尾を追いつく子猫の姿である。これ以外にも、自然が創造した数多くのものをみると、心温まる愚行には、様々な知恵のひとつが示されているように思われる。その知恵こそは、生きるために人生の喜びをみい出すこと、創造のために作る喜びをみい出すことに他ならない。或いは、イエイツ氏が他で述べているように、悲しみを忘れるために、不運を受け入れることに他ならないだろう。

私たちアイルランド人は価値ある美徳と生きる目的を隣人に奪われたため、みずからを慰めるため、ときに不運を愛する外なかった。そのことがアイルランド人にとっていかに辛いことであっただろう。このエッセイを読む人たちは、イエイツ氏がとても機知に富む人であることが分かるはずである。彼は、自分の的確な言葉のいくつかは、批判を受けても安全だと考えたのだろう。「根拠のない思いつきだから、何を言っても問題はない」と半ばいたず

らっぽく語っている。私は、これを書いた人物の思想について議論や批評をするつもりは決していない。というのも、私には彼をどのように理解すべきかわからないからだ。私は楽しんで読むことで満足している。それはきっと、彼の友人たち、また、この本を読みニューヨークのベリンガー夫人に感謝の気持ちを抱く新しいファンにとっても同じことだろう。これらのエッセイが様々な刊行物に掲載されると、夫人はそれを切り抜き、保存していたのだ。作家というものは、書いた内容、掲載雑誌のことなど忘れてしまっていることが多い。先ほどの子猫とは違い、自分の尻尾を追い回すことには興味を示さないのである。一冊の本にこのエッセイを纏めると、互いに光を反射しあい、或るひとりの人物を再び作り上げるであろう。ダブリンを去ったが、誰も忘れようとしないう、ひとりの人物を。

A. E. (ジョージ・ラッセル)³

「サミュエル・バトラーの思い出」

バトラー⁴ は私の学友であった。1867年から1868年にかけて、私はロンドンのニューマン街にある、ヒザリー美術学校の学生だったが、彼もそこで一緒に学んだ。正直なところ、バトラーには絵の才能がなかった。何年間も、彼が人生で情熱を燃やしたのは、ジョン・ベリーニのような画家になることだった。だが、それも骨折り損だった。彼には才能がなかったのだ。私がバトラーと知りあった頃、そのことに気づき始めていたため、その様子は痛ましいものだった。私たちは彼を慰めようとして、偽りの希望を与え、迷わしたかもしれない。いくら知性があっても、適切なものでなければ、決して画家になれるものではないのである。

私とバトラーにはスコットランド人の友人がいた。バトラーは彼が音楽に詳しいがゆえに、その友人を好んでいた。その友人は、「そう。バトラー君、君は先生だよ」とよく言ったものだった。そのあと、スコットランド人らしく、ゆっくりと含み笑いをした。バトラーは、まるで先生のように、我々全員に規律を守らせていた。私たちは、互いのことは、君づけではなく、略し

て苗字だけで呼び合っていた。だが、バトラーを呼ぶときだけは、いつもバトラー君だった。一度、大胆なロンドンっ子の友人が思い切ってこう尋ねたことがあった。「アルハンブラに行ったことがあるかい、バトラー？」と。その際、彼はアルハンブラを「アランブラ」と発音してしまったがために、バトラーに攻撃の機会を与えてしまった。h音をいつも発音するイングランド人は、h音を持たない相手をつねに正すのだ。「その単語にhはあるのかい？」とバトラーは言った。この哀れな友人が思い切ってバトラーを敬称なしに呼ぶことは二度となかった。⁵ いや、この件に関しては我々の誰もが、と言うべきか。

アイルランド人は、自分と対等の人間を好む。そのため、みなが認めるように、仲間にするにはこの上なく素晴らしい。ドイツ人は自分より優れた人間を好む。ところが、イングランド人ときたら、自分より劣った人間と一緒になのを好み、そうでない関係ではくつろげないのだ。彼らは、子の先行きを案ずる両親や後見人にパブリック・スクールや大学へ送られて、高慢な態度を身につける。イングランドには、冷笑といえるものがふたつある。ひとつは、ロンドン子が用いるさまざまなコクニーのもつ冷笑であるが、これは誰にも尊敬されない。もうひとつは、大学やパブリック・スクールで身につける冷笑であるが、それはみなに尊敬を強いるばかりか、外国人にも強いることから、ゲートにも強い印象を与えた。ホテルの従僕にも冷笑的態度が見てとれるが、大仰過ぎて一目でうわべだけのものだとわかる。そんな中で、バトラーはとても丁寧で礼儀正しかったが、彼にも冷笑の態度が感じられた。慎重に隠しているからこそ、いっそうよく目立ったのである。

私たちは美術学生であったので、ボヘミアンになろうとした。もしもバトラーが仲間でなければ、そうなっていただろう。バトラーには、とてもお気に入り入りの学生がいた。ある日、彼は、その学生の手を握ると、「やつ」などという言葉を使わぬように、と父親のような態度で言い聞かせたことがあった。バトラーは頭からつま先まで「上流階級」のイングランド人であった。「上流階級」のイングランド人は、信仰、妻子、財産、そして名声さえ手放

したとしても、そのことで臆することはないだろう。しかし、彼らには階級への自尊心が心底身についている。アクセント、表現、身振り、言い回しに、階級を表す痕跡^{しるし}を入念に残しているのである。こういったものを身につけていれば、どこに行っても、どんな人物とも交際できることを知っているのである。つまり、これらはパスポートのようなもので、貴族の自由を与えてくれるものなのだ。貴族、平民を問わず、イングランド人はことごとく、力づくで、もしくは忍耐強く模索することで、自分の想念や行動を誰にも邪魔されることのない安全な場所を得ようとするものだ。だが、その中でも上流階級のイングランド人は、最も自由なのである。相手がジェントルマンであると知ったなら、警官でさえ注意するのをためらうであろう。

『万人の道』⁶において、バトラーはイングランドの家庭生活を描いたが、それを読むと愛や共感^{共感}は家庭生活に必須のものではないことが分かる。バトラーは、このような家庭生活で育った人間であるため、愛や共感にはほとんど重きを置かない。それでも、バトラーほど優しい人間はいなかった。善良さは彼に生まれつき備わった性格であり、彼の大部分の作品や思想の源であったと思う。イングランド人が、とても気ままに人生を送っているのは、主義としてそうしているのであるが、厳格な法律が実施されている場所では、それに潔く従うのであった。しかし、法の及ばぬところでは、行動や思想に対して最大限の自由を求めても、その自由が認められていた。

イングランド人が個人の自由をとっても愛するのは、国民として顕著な特徴であるが、それはあくまで自分たちのためにそうしているのである。何といっても彼ら自身が、他民族をよく奴隷にしているのだから。また、個人の自由への憧れが高まるにつれ、それとともに、その不可欠な要素として、人間性そのものの価値も深く認識するようになった。清教徒主義は、徒勞となったが、悲痛なまでに、この認識と戦った。バトラーの善良さは、彼が人間性そのものを好んだためである。それゆえ、彼が、人間性から本来の心の糧を奪い取りかねない、一切の慣習、実体のない幻想、偽善的な「上品な振る舞い」を痛烈に批判したのも、そのためだった。

ヨーロッパ大陸の人びとは人間性を嫌悪するため、ゴヤのような人物を生み出したのかもしれない。だが、イングランド人は、そんな芸術にせいぜい蔑みの眼を向ける程度である。ヨーロッパ大陸の人は、法や規則など、もっぱら自分の金儲けに欠かせぬものを好んだ。しかし、たとえイングランド人が、大陸の隣人に距離を置いていたとしても、本当を言うと、彼らを嫌っていたわけではなかった。それどころか、実際、イングランド人は自分も強く持つが故に、隣人の利己心を好ましく感じているところがあった。エドモンド・バーク⁷に「この古代人の善良さと高潔」という語句がある。オランダ人の場合も自由を愛する国民で、イギリス人と同じような善良さを持っている。レンブラントやシェイクスピアは、醜悪なものから芸術的快楽を引き出したが、それは愉快的な笑いからであり、ゴヤのように、憎しみを込めた笑いからではない。実際にいくつかのゴヤの作品を眺めていると、ゴヤは、自分の絵を見る人たちさえ憎んでいて、その絵を通して友人すべてを侮辱し、不快な気分させようと目論んでいるのではないか、という気になってしまう。つまり、その芸術は一種の不規則な衝動を刺激して、ゴヤや他の者に不快感や忌まわしい感情を引き起こしたのだろう。⁸ バトラーは、自由な知性（啓蒙思想）のおかげで、魂や感覚と引き替えに、他の者と分かち合える自由を手に入れることができた。いわば、彼は自らが好む自由を手に入れたのだ。なるほど、スコットランド人は、自負心をもつとき、いい気分かもしれない。だが、バトラーが願うのは、感性、欲求など、人の性質を構成する一切合切と良い関係をもつことであった。自分たちだけを中心とする、スコットランド人の自負心は、これらの弊害となるものだった。このことで、バトラーが譲ることはなく、ヒザリー美術学校においても同じであった。バトラーは、私たちが何らかの因習や妄想の虜になっていると考え、あざけりとユーモアで、それらから私たちを解放しようと努めた。

バトラーは、学んでいたレッスンで、いつもある所を自分の場所に決めていた。それは、できる限りモデルに近づき、細い絵筆で彼なりにジョン・ベリー二流の絵⁹を描くためだった。非常に集中して、たいていの場合、全く

口をきかずに、そこに立っていた。だが、何気ないおしゃべりにもじっと耳を澄ましていて、ウィットに富む言葉で相手を怯ませるチャンスをうかがっていた。バトラーは太い眉と、灰色の眼をしていた。——あるいは、明るい薄茶色であっただろうか。その眼は、時として、絵の修業という希望の見えない骨折りを積み重ねたので、疲れているように見えるときがあった。バトラーは、仲間の美術学生に精神的隷属や不誠実なものをみつけると、それがバトラーの誤解によるものであっても、手厳しく批判し、極めて誠実な人物ですらひどく傷つけるようなことをよく言ったものだった。その後で、なんであれ、誠実さを尊重していたバトラーは、謙虚になり、相手に謝罪したが、いつも受け入れられるとはかぎらなかった。そのことを、彼は私によく話したものだ。そして私は、寒々とした暖炉で燃え上がる小さな炎のような灰色の眼に、抗いがたい、心を打つような優しさを感じたものである。高潔な者がいつも寛大というわけではないし、ソロモンのように賢いわけでもない。

この頃、私は美術学生として忙しく、朝から晩まで絵を描いていた。さもないければ、もっとバトラーと会おうとしていたはずだ。人を小馬鹿にした表情の中に、時に感じる優しさほど人を引きつけるものはない。その上、彼は私よりかなり年上であった。年上という存在は、純真な若者にとって魅力的なものである。当時の私は純真だった。私は、あらゆる大切な好機を失ってしまった、と悔やむことがあるが、そのうちのひとつがバトラーのことをよく知る機会であった。詩人が悲観論者であろうと、楽観論者であろうと、あらゆる詩や芸術の根源にある人間性そのものに私は少しずつ感動し始めていた。かりに、バトラーと多くの時間を過ごしていたなら、私は人生の教をを瞬く間に学べていただろう。マシュー・アーノルドの考える「甘美と光明」は、バトラーの好みに合わなかった。そして、ワーズワースによる高尚な倫理には全く関心を持たなかった。愛情豊かな母親であれば、子供が善良な人に育って欲しいと願う心は、子の幸福を願う気持ちの半分にも満たないものである。そのような母の愛情を、アイルランド農民の間で私はよく目にする

ことがある。人間性とは、傷つきやすく、もがき、欺かれるものだと、バトラーは考えたが、それは、母親の子供への愛情にも同じことが言えよう。そこにこそ、彼の「善良さ」と影響力の源があるのだ。このことでは、彼はイングランド人の中でもとりわけイングランド人らしさを示している。また、この点では、制度整備家や慈善家のようなところはない。ましてや、哲学者でも、他の何者でもない。ただ、日常生活の現実的問題に関与し、対処するひとりの人間にすぎない。彼は、優しいユーモアとこの上ない真の詩情で人を癒しながら、苦悩する人間すべての心の痛みを慰めた。

バトラーは女好きであったが、結婚生活を受け入れることはできなかった。女性を好むのは、なによりも女性の性質が善良なためであると、バトラーから聞いたことがあった。女性は彼と一緒に笑っても、彼を笑い者にするのではない。それから、女性は従順で教えをよく守るので、バトラーがもつ教師的資質が、生徒のような存在を好むのだった。彼の女性に対する態度は、微笑んで気儘にさせるというものだった。この保守的な時代にあって、魅力的な女性はいまだに中世に生きて、遠慮がちに、悔い改めているかのようにであった。それは、まるで美しすぎることに、または、陽気で愛嬌がありすぎることに、女性たちが許しを請うているかのようなものである。だから、バトラーが、彼女たちを自分より劣った存在と考え、特に女性に対してはいつも親切で、父親のように接し、また天真爛漫に振舞ったとしても、彼女たちは少しも気にしなかった。バトラーがなぜ結婚を嫌うのか、その理由は容易に想像できる。結婚すると、バトラー特有の風変わりな、気まぐれな思想や性癖を追い求める自由が奪われてしまう、と考えたからではないだろうか。普通のイングランドの男性はこんな思いやりは持たなかった。彼らは、もっと粗野な気質であり、自分や自分の妻子、召使い、「自分が所有するあらゆるもの」は好きに扱ってもよい、という大昔の特権を捨てようとしなかった。普通のイングランドの男性は、家庭における唯一の存在で、家庭の統治者にして、かつ主人であった。妻は副官のような存在である。当然ながら、バトラーにはそのような生き方はできない。その結果、自由を維持するために、

結婚生活という考えを永遠に退けてしまったのではないだろうか。もし彼が結婚するようなことがあるとすれば、間違いなく、夫の絶対的権力に対して何の疑問を示しそうにない伴侶を選んだであろう。私が知っていた女性にサヴェッジさんという人がいた。『万人の道』に登場する善良な女性のモデルになった人物である。彼女は美術学校の学生で、あまり若くない。また足が不自由であった。人生は彼女にとって修練の場のようなものであった。彼女は美しく、丸みを帯びた顔をしていた。その眼は薄い青色で、澄みきり、輝きに満ちていた。頭は小さく、魅力的なまでに表情豊かで、つりあいが取れた顔立ちをしていた。彼女からは善良さと良識があふれ出ていた。彼女の性格にはあまり他人と打ち解けないところがあったが、たとえ彼女に話しかけることがないにせよ、みなから好かれていた。間もなく、バトラーは、彼女を笑わせるのは簡単だということが分かったが、いつものように慎重だった。ある日、彼は私に意見を求めてきた。どこかで手に入れた、「少年クイズ」を彼女に出しても差し障りないだろうか、という相談だった。「少年クイズ」とは、無邪気極まりないものであるが、かといって全く相応しいもの、というわけではなかった。助言の内容は忘れたが、二人が親密な友人になった、ということだけは覚えている。

バトラーは結婚を避けていたが、彼も肉体的欲望には勝てなかった。「知り合いに、若い針仕事をしている女性がいるのだが、いい娘でね。ミシンをあげたこともある。彼女と交際しているんだ」。そのことを告白するとき、自嘲気味になり、彼でも逃れられぬ悲しき性を認めながら、恥ずかしさで何度もうな垂れて退いた。彼もまた『万人の道』を歩まされることになった。自分の罪を告白することは、彼がいつも自分の人生観の一部としていたことである。さらに、それは、社交的な性格や人を最も引きつける性質に欠かせぬものであった。

バトラーは、ギリシア劇を好きではなかったと言っていたけれども、古典について優れた学生だった。古典のほかに彼が読むものといえば、シェイクスピアと『種の起源』¹⁰とあとは聖書だけであった。彼にとって、『種の

起源』は一番の愛読書であった。バトラーはお気に入りの学生がいると、数日間、彼を観察し、その後、用心深く丁重な物腰で近づいた。——バトラーはいつも礼儀にうるさかった。——そして、こう尋ねたものである。「この本を読んだことがあるかい」と。おそらく、その後、「この本を読んでごらん」とも言っただろう。バトラーは私にもこの本を貸してくれたが、そのことを私は今も誇りを持って思い出す。『種の起源』によって、人格神への信仰は完全に破壊されてしまった、と話してくれたことがあった。ごくたまにはあるが、お決まりの質問をする代わりに、「神はいると思うかい」と学生に尋ねることがあった。この件に関しては、学生だけにとどまらなかった。モーズリーという名前のヌードモデルは、しばしば、ヒザリー美術学校でもモデルをしていた。バトラーはこのモデルのことを気に入っていた。彼は、自分の観念に訴える、気まぐれな高潔さを彼女に見出していた。一度、教室に深い沈黙が訪れたとき、「モーズリー、神さままっていると思う」とバトラーが尋ねているのが聞こえた。微動だにせず、また表情を変えることなく、モーズリーは、「いいえ、悪魔（ボギー）など信じておりません」と答えたことがある。バトラーはこんな返事を予想していなかった。陽気な、ロンドン訛りの、小生意気な言葉は、思いもよらぬものであった。バトラーが困惑して立ち去るのを見て、私たちは笑った。彼をだしにして笑うのが好きだった。それに、当時、仲間のほとんどがキリスト教信者であった。実際、神の存在を疑うなど思いもよらないことだった。今日だけでなくその当時も、アメリカでもイングランドでも、惰性のように身についた信仰心は、芸術家の特徴であったので、神を恐れないなら、大胆な者の中には、信仰心をもたぬ者もいたであろう。芸術家というのは、教会に行くこともなければ、宗教について考えることもない。彼らの信仰は、深く穏やかな眠気を誘うような惰性の中で、深く維持されてきたのである。私が思い出すのは、ある男のことである。後に、名声を勝ち得た美術学生であった。彼は議論となると、とても感情的になり、気障で気取った話し方をした。バトラーは、ひと言を何度も繰り返して応じるだけであった。——「ばかな！」というひと言で終わっ

た。私は、何の疑いもなく、このジェントルマンが今もお正統な信仰をもっていると信じている。根拠のない信仰だからこそ、ひとは何を言われても信じるのである。バトラーの父親は、裕福な、英国国教会の主席司祭であった。尊大で、権威のある人物であったと想像できる。だから、「予定通りに事が進まないと、父は、必ず機嫌を悪くした」とバトラーは言ったことがあった。バトラーが正統な信仰から離脱し、聖職者になる代わりに、芸術家になることを告げたところ、家族は彼への財政的援助をことごとく拒んだ、ということである。これからすると、父親が、バトラーのニュージーランド行きの渡航費用を支援した、という話は真実ではない。バトラー自身が私にこう話してくれたことがあった。友人からなんとか一万ポンドを借りてその費用に充てたこと、またそれまでの人生で何にもまして、このことを誇りに思う、と。ニュージーランドには4年間滞在した。¹¹ その後、市場が好転したおかげで、イングランドへ戻り、借金を返済することができた。その一方で、彼は自活して美術を続けていくのに十分な資金も蓄えることができた。バトラーは、ニュージーランドでの生活や、羊に対する嫌悪について話すことが好きだった。羊がいつも道に迷いはぐれるので、気をつけるため、「羊」¹²という言葉を胸に刻んだものだ、と話した。彼は、他の馬と自分用の馬、または、他人の馬と自分の馬を区別しなかった。主は乗る馬を選ばず、「馬の勇ましさを喜ばれない」が、自分はまるでその主のようであった、とバトラーは語った。¹³

サム・バトラーは真理の探究を望み、人生と信仰からヴェールのような幻想をすべて剥ぎ取りたいと願ったが、それは、まさしく詩人の特徴であった。バトラーとその弟子、ジョージ・バーナード・ショーは、誠実さを追求すれば想像力に富む人生を送れるもの、と考えた。ミケランジェロが、イタリア人だけが芸術を理解できる、と主張すると、ヴィットーリア・コロンナ¹⁴ が「ドイツ絵画には人の感情を動かすものがあります」と返した。すると、ミケランジェロは、「確かにそうかもしれませんが。でもそれは私たちの感性が乏しいからではないでしょうか」、と答えた。詩と創造豊かな生活が花開く

のは、真実が最高の状態に達するときのみである。当然のことだが、中途半端な知識や思想による教育は、数多くの感傷的な人間、へぼ詩人、修辞学者たちを生み出すことになる。偉大な芸術家や偉大な詩人たるものは、厳格な精神の持ち主ばかりだ。ドイツ絵画は「女性や聖職者、そして上流の人びと」にこそ相応しいものである、とミケランジェロは述べた。詰まるところ、詩人というものは、神を信じなければならない。厳粛な思考なくして、宗教心はないのだ、と。

物事を徹底的に知る。それが無理なら、全く何も知らないでいる。——これがバトラーの信条であった。この考え方は、古典教育に由来するものである。古典教育で、重点は学問の詳細な事柄にあった。例えば、バトラーは21歳になるまで音楽を勉強したことがない、と言っていたが、その後、自由になる時間は全て音楽に充てて学んだ。しかし、バトラーが関心を持ったのはヘンデルだけで、それ以外は、知らなくとも満足していた。徹底的に学べなければ、彼は全く学ぼうとしなかった。彼の目に、浅薄な知識は取るに足らない無知にうつり、浅薄な知識が生み出す精神的性癖は不幸をもたらすと考えていた。画家の中でバトラーが特に評価していたのは、ジョン・ベリーニのように、細かい部分まで徹底的にこだわる画家である。様式を軽蔑すると公言しながらも、バトラー自身、言葉の使い方では形式にこだわる人物であった。バトラーと私がよく昼食を食べに行っていた食堂があるが、そこで出会ったのは、即席プディングを「利用した」ことなどは一度もない、と話す男性であった。「利用する」(“use”)という動詞をこのように使用するのには、バトラーにこの上ない楽しみを与えることになった。彼がこの話を何度も繰り返すのを聞いたことがあった。

バトラーは、いつもシェイクスピアを読んでいたように思う。それ以外の詩を読んでいないと思うが、一度、どこかもの思いにふけるようにホイットマンの詩を読んでいたことがある。——彼は「目録製作者」¹⁵ とホイットマンのことを呼んでいた。しかし、バトラーは生粋のイングランド人であり、誰も立ち入るのを許さぬ、自分だけの孤独が生み出す想像の中で、思いにふ

けた。それは、共感を好むフランス人が、他人を迎え入れる開放的な生活を想像して生きたのと対照的であった。思い出すのは、最後にバトラーを見かけた時のことである。ロンドンの中心街から離れたところにある宿に宿泊し、ひとり朝食の席についていた時のことである。その前夜、私は、7・8年ぶりにアイルランドから出てきたところだった。その席から、バトラーが通り過ぎようとするのを見かけたのだ。うれしさと驚きで、彼を呼び止めようと、急いで窓を上を開けた。しかし、よくよく思案した結果、悲しいことだが、はやる心を抑えた。私は窓を閉め、食事に戻った。「イングランド人側から招かれないのに、こちらから押しかけて邪魔をしてはいけない」と考えたのだった。

(*The Seven Arts*, 1917年掲載)

「故国を思って」

あらゆる所で、いや、英語が使用される国々のほとんどで、注目されるのは、君主制が終わろうとしていることである。学校で、力を持つのは、先生ではなく生徒である。法廷でさえも、法の番人たる裁判官は、世評を恐れるあまり、極めて慎重に裁判を進める。最終的に、その変化は家庭生活や家族の中にまで入り込む。もともと、家庭には二重の君主制があるのが常であった。言うなれば、母親は家の中で、父親はその外で、世界を治めてきた。商取引は、委員会、組合、株式会社の扱うところとなり、個々の人間は、血も涙もない数字で管理される、巨大な機械の単なる歯車か滑車のひとつと化してしまった。それと同じく、家庭においても、専門家と称する、最新科学が偽療法に詳しい者が母親に取って代わり、彼女のいるべき地位を占めている。また、母親が頼むこともある。母親が、自分の立場を忘れて、気晴らしに出ることなど、以前は考えられただろうか？

これは奇妙な変化であるが、非常に重要な意味をもっている。ひとつには、家の主人と女主人^{あるじ}という、重要な人物を今は失ってしまったことである。本来のもてなしが行われていた頃、ほんのつかの間でも、ふたりの寛大な主人

たち（屋敷の主人とその令夫人）の微笑みに客は浴することができたのである。彼らの寛大な心は、客人の心を和やかにし、本当に魅了するものであった。こうしたものに比べると、ワイン、食事、客などは副次的なもので、あまり重要に感じられない。もてなす側の豊かな愛情は、客の張り詰めた心そのものを暖かく包み、安らぎを与えたのだった。今や全てが変化し、客をもてなす心より、もてなす方法がより重要なものとなっている。私たちは、もはや人を楽しませるためではなく、自らが楽しむために行くようになった。氣心が知れ、愛すべき来客が訪れた晴れやかな宮廷による、昔の甘美な宮廷政治は、崩壊し消えてしまった。主人と女主人の愛情、家の料理場、古風な屋敷とそこに集まる友人たちは、私たちにとって意味のないものになってしまった。私たちが求めるのは、現代風の食べ物や飲み物が出される場所で食事することなのである。だから、レストランでの食事ということになるのだが、そこは騒々しく、気が散る上に混雑している。私自身について言うと、そんなところで食事をするより、氣心の知れた人物の台所で食事をするほうが、はるかにましだ。ひとりの人物が支配する時代は終わりを告げた。かつては、主人が権威を持って、会話をリードし、女主人が会話を取り仕切っていた。女主人は、自分の話をする時間をとれなくても、来客の話に耳を傾けることは十分できた。来客は、会話の流れが女主人のほうに向かうよう氣遣い、彼女の同意を求めながら話をした。若い頃のことである。食器などが下げられた後、時代物のマホガニー製のテーブルを囲んで座っていた。テーブルには、現在のように、目映いばかりに白いテーブルクロスなど掛けられていなかった。ワインの満たされたグラスとデカンター、客たちの顔や衣装、こういった多彩な色が、磨き上げられたテーブルの面に、映し出されていなかったならば、さぞかし陰気な雰囲気になっていたと思われる。頭上には、部屋の唯一の照明である、装飾を施した華麗な枝つき燭台が下がっていた。晩餐会の輪の外は、濃い影が落ちていたため、人びとの顔はレンブラントの肖像画さながらに見えた。潮時になると、女主人と貴婦人たちが部屋から立ち退き、後には男性だけの会話が残る。すると、いかにその集まりがつまら

ないものになったことか！ 女主人がいないとどれだけ寂しく思えたことだろう。神が女主人を取り囲んで、私たちと隔ててしまったのだ。

君主制の制度が家庭から消えたように、学校からも消えてしまった。私が教育を受けた学校では、怖がらせることで、教師が生徒を抑えつけていた。その先生は、スコットランド人で、他の方法を知らなかったのである。だから、私たちは少しも民主的とはいえなかった。だが、先生の前で震えていたとしても、互いを恐れることはなかった。学校には、50人から60人ぐらいの生徒がいたが、不思議なくらい多様な人間が集まっていた。本人の能力によるのか、家庭の個性のためなのか、ここで学ぶ少年たちは、どの少年も目立つ特徴をもっていた。この時代、親はほとんどお金を持っておらず、旅費は大きな負担であった。そのため、休日はわずかだったし、まとまっていなかった。例えば、クリスマスに実家に帰ったことはなかった。どの場所でも、まだ、郵便馬車¹⁶に代わる、低料金の鉄道が通じていなかった。それでも、私たちは自分の家のことばかり考えて生活していた。——家のことばかり考えて過ごし、その思いに取りつかれた。まさに、それは、私たちの想像力を育む食物や飲物であり、同時に、私たちを精神的に豊かにしたのだ。私たちは、絶えず互いの家のことを話したものだ。この侘びしい住まいで、友情は私たちの唯一の慰めとなるものだったが、それぞれの家においてよく似た趣味や経験があったことから生まれたものだった。教育方法は、そう言ってもいいなら、耐えられないほど厳しいものであった。しかし、その厳しさがあったからこそ、家庭がいつそう懐かしく思われたのだった。私たちは、もっぱら自分の家族のことばかり考えていた。幸福なときも、苦しいときも、近頃の学校で自由主義的な教育を受けた生徒たちとは較べようのない集中力があつた。最初に読む古代ローマの作家、コルネリアス・ネポス、¹⁷ ラテン語の練習問題、ぞっとするほど嫌な、その時代のラテン語文法、大きなラテン語辞書、ギリシア語辞書であろうと、——教育方法への反撥によって、学習効率は高めることができる、と考えられた——或いは、家からの手紙、綿々と語る家の話、ホームシックになったことなど、——何の話であろうと——

幼く、悩みのない少年たちには無縁の熱意で語りあった。12歳にもならない少年が、両親の不仲、母親が弟ばかりを最優先にするなどの悩みを、小声で話してくれたのを思い出す。ある少年は、実家の生活が困窮していることを心配していた。さらに、もうひとりの少年は、誰もいない所へ誘って、インドの陸軍将校と結婚した美しい姉からの長い手紙を読んできた。おそらく、精神を集中する方法を学ぶには、生真面目なスコットランド人を教師にして、昔ながらの拙い方法でギリシア語やラテン語を学ぶことほど、優れたものはないだろう。

少年は、大人の共感と理解が及ばぬものとたいてい考えられる。それが分かるのはその子の母親だけだ。それは、よく言われるように、子への愛が母親の眼を節穴にするからである。もともと、少年は、あらゆる中で最も純真かつ独創的な存在であることから、想像的願望が泉のように湧き出てくるものなのである。もし、自発性を保持さえすれば、チャールズ・ラム、コールリッジ、シェリーのような人間になるかもしれない。あるいは、規模が大きいスケールとなると、ダンテやミケランジェロのような人間になるかもしれない。当代の学校の使命とは、少年たち自身が年下の少年を世話し、猛獣が子を舐めるように、楽しんで、その少年から個性を力ずくでことごとく奪い去り、平均的なものとするところなのである。それに関連して、思い出すのは、あるイングランドの貴婦人が、まだ幼い息子に会うため、有名なパブリック・スクールを訪ねたときの話である。彼女によると、遠目には子供を他の少年と区別できなかったそうである。彼女は力なく微笑み、こう付け加えた。「有名なパブリック・スクールの生徒はみな、他の生徒と全く見分けがつかなくなることを望んでいるのでしょうか」と。とはいえ、世に際だった個性をもつ人間が生まれることはもうないのだろうか。息子が学校から戻って来る時には、平均的な少年となり、父、おじ、それに周囲の人と変わらぬ、平均的な男性に成長することを、この母親は知っていたのである。友人のひとりにとっても興味深い人物がいるが、彼は自分だけの楽しみ、つまり、夢想、想像力、信仰などを楽しむことに、とても満足していた。教育もなければ、優れた珠

玉の詩篇もなかったけれども、その男は詩人といえた。彼は、学校でもっと長く学ばなかったことを後悔していた。学校にいたなら、ばかげた空想はすべて自分から取り除いてもらえただろう、と言うのだ。この気の毒な男は、自分がどれほど幸福で興味深い人間であるのかを理解していないのだ。彼が分かっているのは、他人と異なっているために、妻と友人みんなが自分をよく思わない、ということだけであった。その一方で、1830年のことであるが、友人たちに自分の短所を丹念に磨きなさい、と助言したフランス人の老画家がいた。

昔の教育方法は容赦ないものであったため、生徒たちには、我慢できないと思えるほどであったが、個性という特徴を薄め、知らぬ間に消滅させるようなことはなかった。だが、当代の学校では、毎日のように、民主的手段で、個性を消すことが行われている。18世紀に、イートン校の或る有名な教師は、「私の仕事は、ギリシア語を教えることであって、道徳を教えることではない」と述べたことがあった。そのような確固たる信念に満ちた世紀では、人々は互いに相手のことをあまり気にかけなかった。不幸せで、道を踏み外していても、他人が干渉してくることはなかった。ギリシア語を正しく学んでいれば、道徳などは個人の問題といえた。チャタム¹⁸が、暗に述べているように、彼がイートン校を卒業したとき、彼に「おびえる」生徒がいたかも知れない。だが彼は、石臼のような近年の学校生活で粉々に砕かれたなら、角のある、魅力あふれる、優れた個性を残すことはできなかつただろう。このような近年の学校は、アメリカでもイングランドでもとても信望があり、生徒を完全に掌握できるため、生徒の人格形成に強い影響力がある。その点でいえば、もはや、「こどもはおとなの父」¹⁹（「三つ子の魂百まで」）という言い方は正確でない。むしろ、「生徒はおとなの父」という言い方のほうが、正確であろう。だが、アイルランドにおいては、事情は異なる。昔ながらの容赦なく厳しい教育方法は放棄され、生徒が教師を怖れることもなければ、生徒同士がお互いを怖がることはない。こうも説明できよう。アイルランド人は、大人、少年を問わず、また上下の別なく、民主主義者というよりは、は

るかに貴族主義者なのである。アイルランド人の原点は、故国と家族にあり、両者に激しい愛着を持っている。そのため、実は学校や大学に帰属することなく、卒業してしまうのである。

このような理由で、アイルランドでは、相変わらず、学校や大学より、家庭のほうが強い影響力を持っている。これは、イングランドの状況、また今後のアメリカでの状況とは、全く逆の現象といえる。アイルランド人は、上下の区別なく貴族主義者であると述べたが、私が言いたいのは、アイルランド人が貴族的であるとか、貴族指向が強いとか、いくばくか近頃のイングランド貴族と似たところがある、などということではない。アイルランド人は、自分が非凡で、他民族とは違っていると思っていたがる。それ故、誇りを抱くのだ、ということである。自然そのものは、私たちが背くことがなければ、個々の人間にそれぞれ違った生き方を用意するであろう。森の中のありとあらゆる葉、小枝がひとつひとつ異なっているのと同じことだ。自然の女神は、ひとりひとりが異なるアイルランド人の姿に喜び、気丈なわが子が自分の利益のために戦うのを見て微笑むのである。

典型的なアイルランド家庭は、貧しく野心的だが、同時に知的な面もある。私たちには、かつての「古き良きイングランド」²⁰ 時代に特有のものであった、「おしゃべり好き」という国民的習性がある。当代イングランドでは、はっきりしない男性が好まれる。畢竟、のみ込みの悪い少年が好まれることになるのである。アイルランドでは、大人と少年はいずれも利口であるのが好まれる。のみ込みの悪い少年がいると、その子は、のるかそるか、イングランドへ送られ仕事に就かせられる。しかし、利口な少年の場合、話は別だ。その子は、家庭で必要なことを全て学ぶと、直ちに、家族の相談相手となる。家庭内でなんでも率直に話しあっていると、それより他にとるべき方法がないのである。その少年は、学費や大学を卒業するまでに必要とする費用、奨学金や賞を得ると、どの程度その費用を減額できるかなど、細部にいたるまで全てを知っている。彼は成長するにつれ、専門家のように、弟たちが育っていくのを見て、若者らしい賢明さで、彼らの今後の見通しについて大いに

助言しようとする。彼は、母や姉妹が見守る中、絶えず勉強しているが、ことによると、度が過ぎるのだろう。だが、少年はあまりに生真面目すぎる。母と妹の側では、少年を心配する気持ちが先立って、褒める気にならないのである。アイルランド人の母親の特徴は、実際に、こう言えるであろう。イングランドの母親が子をいい気にならせるのとは異なり、アイルランドの母親は、子を気遣いながら愛するので、心配が先立ち褒めるところまでいかないのである。子供のことをよく知っているからこそ、判断が慎重になるのだ。家族でなされる大切な話し合いに、若さゆえの傲慢さで加わることで、新しく手に入れた知識に生命を与える機会を得る。父、母、兄弟姉妹、など家族全員のことを、彼は気に掛ける必要があるのだ。家庭の繁栄に対して責任を負っている。実業界に入り、決まった道をただこつこつ歩むことに専念していればよい者たちに比べて、その少年の頭が悪いわけではない。それどころか、その知性は絶えず訓練されている。豊かな会話がその好奇心を活気づけるゆえに、知的好奇心に満ちている。この点では、イングランドやアメリカの少年とは異なるのである。なるほど、彼は、限られた勉強に割く時間を、様々な読書に費やしたい、という誘惑にいつも駆られることがある。また、彼は、懐疑的であると同時に、すぐ真に受けやすい人間でもある。もし、彼が快活かつ率直に意見を述べると、彼を警戒するものは誰もいない。イングランドの家庭では、商才が優位に立つのだが、アイルランドの場合は、知力が優位に立つのである。私たちは、自由な知力が持つ勇気を愛する。少年の考えが大胆であればそれだけ、一家の希望も湧いてくるからだ。少年と彼の家族はみな「心を楽しませるもの」を好ましく思っている。それは、聖パトリック以前の時代から脈々と続く、アイルランドの伝統なのだが、目に見えるものとしては、何も持っていない。人びとは、あまりに貧しくて、ゆとりがないのである。いや、そうではない。むしろアイルランド人には数多くの「心を楽しませるもの」がある。だが、それは、少年らしい友情や、家族のとても強い愛情の絆の中に存在しているのだ。だが、そのことは、彼らがアイルランド人であること、また、互いを支えうる希望を抱くこと、などの理

由で、やむを得ないことなのだ。大家族が暖炉を囲んで続ける長いおしゃべり、田舎道を歩く才気ある少年たちの長いおしゃべり、——これらは、決してはらはらするような娯楽ではない——言ってみれば、「スポーツ」などの楽しみとは似ても似つかぬものである。

アイルランドの家庭が与えてくれるものがある。貧しい人々には、海と同じくらい計り知れなく深い愛情が与えられる。その愛情は、彼らの罪でなくとも、無為に過ごすことのために、海のように激しい渴望へと、時に変化する余地が十分ある。裕福な人々の場合、野心と自由な知性が与えられる。そして、みんなには、人間関係を悪くするのではなく、良くするような人間性についての、古くからの知恵が与えられる。

イングランドの少年の場合、歴史は全く異なる。有名で、歴史のある学校に入学すると、両親、おば、いとこたちみんなが期待するように、認められることを願う。彼の望みは、イートン校、ハロー校、またはラグビー校の生徒となり、オックスフォード生かケンブリッジ生になり、アクセント、服装、物腰に大学固有の特徴を身につけることである。アイルランドの少年にとって、この望みは不快であると同様に、あり得ないことだ。家庭のほうが学校や大学より影響力が強い。有名なイングランドの学校では、学生が互いに管理しあう。規則と礼儀に関する仕組みは、民主的に発展していったものなので、みんなが従わなければならない。この種の従順さは、イングランド的なものであって、アイルランド的なものではない。アイルランドの少年であれば、このように簡単に屈するはずはないのである。というのは、アイルランドの少年の背後には、感動的な劇のような潤いのある家庭生活が存在するからだ。イングランドの家庭生活には、そのような感動的な家庭生活は存在しない。——イングランドの家庭生活は、裕福で、これといった事件もなく、法の保護下で、よそよそしく冷たいまなものである。アイルランドの家庭では、よく起こることであるが、小説家を待ち望む。しかし、残念なことに、イングランドの読者は、アイルランドを題材にした小説など読まないし、アイルランドの読者はあまりにも少ない。そのため、アイルランドの慣習は注

目に値するものにならないのだ。知っているのは、アイルランド人は、少年であれ、大人であれ、独立した人間である、ということだけである。アイルランド人は、とても陽気かつ社交的な人間であり、真の仲間と言えることがよくある。また、どんな状況にも適応できるだろう。だが、他人との距離は保ち続ける。友人にとってさえ、不可解で、心を読みとることができない。私の考えでは、このことは正しいことだと思う。他人の秘密を読みとることが可能であってはならない。例外は、産みの母親で、時には恋人が含まれてもよい。だが、普通の裕福なイングランド人には秘密がない。なぜなら、イングランド人のことなら、預金通帳、教理問答集、クラブの規則、国法を見れば、知ることができるのだから。イングランド人は、賞賛に値する国民で、鉄道の時刻表と同じくらい推測しやすい。イングランドの母親は、学校の玄関で子供と別れるとき、息子を失うのではと考え、ため息をつく。だが、イートン校、またはハロー校の賢い生徒に生れ変って戻ってくると考えると、誇らしくなる。アイルランドの母親は、そのような希望や心配は抱かない。息子は、自分のそばを離れたときのまま戻ってくるだろう、と考える。また、息子がインドへ行き、よく訓練されたパブリック・スクール出身のイングランド人たちを配下に働いて地方を統治するようになろうとも、彼は変わることなく、母親が心から願うような、情熱的なアイルランドの少年であり続けることだろう。

アイルランドの教育における主要因は、学校ではなく、家庭にある。アイルランドの家庭は、わずかな財産、知性、そして野心などが、座談と結びついている点で、独特のものがある。この語らいがなければ、アイルランドの家庭ではない。どの莊園領主の館や小屋からも、楽しい語らいという香りが立ち昇る。この点においてこそ、私たちは最も優れている。我々に関して言えば、すべての旅は話し手同士が会うところで終わる。「私たちは、ギリシア人以後、最も優れた座談の名手である」とオスカー・ワイルドは述べた。どんなものでも、アイルランド改革が提案されると、——その案は数え切れないほど出されたが——その改革は、私たちの語らいにどれほどの影響を与

えるのか、私はいつも考えてしまう。フランスには芸術と文学があり、イングランドには上院があり、アメリカには強大なイニシアチブがある。私たちにあるのは、談話である。私たちが、食事をせっかちに待つのも、会話に飢え、渴望しているからである。議論のためや話し上手になるためでなく、互いに人間そのものを好むために、食事の時間を待つのだ。人の声、顔、微笑み、しぐさ、そして、少し改まった家庭内の会話などすべてが好きなのである。改まった話も、話術と巧妙な話し方で、深刻な話から陽気なものへと途切れることなく移り変わっていった。私たちが好きなのは、人間性そのものなのである。だから、人間性を声に出すのだ。一だからこそ、会話は至上のものなのである。アイルランドに「孤立するぐらいなら、口論するほうがましだ」という信条があるように、私たちは、敵さえも、好きになる。アーサー・シモンズ²¹が、西アイルランドで、案内人のコテージに滞在したとき、私の娘に「この人たちが寝ることがあるのだろうか」と尋ねたという。そう思えるほど、互いに話す話題は尽きない。

「今日、イングランドは、アイルランドとスコットランドなしではやっていけない。少なくとも、少しは正常な精神がないとやっていけないからね」とバーナード・ショー²²は述べた。アイルランド人とスコットランド人は、ともに話し好きなのである。

もし、愛情と幸福のために民族が救われることが可能なら、また、芸術や詩がそこから湧き出るような状況を取り戻したいなら、家庭が精力的にその役割を果さなければならない。

(*Harper's Weekly*, 1911年掲載)

注

1. “Homo sum; humani a me totum alienum puto.”
2. William Newenham Montague Orpen (1878-1931): アイルランドの肖像画家でケルト復興運動に関わった。市立美術館の設立者 Sir Hugh Lane の友人としても知られる。

Augustus (Edwin) John (1878-1961): ウェールズの肖像画家・エッチング作家。

3. George William Russell (1867-1935): 北アイルランドのアーマ州の生まれ。W. B. イェイツとは学友で神智学協会に参加。『歌とその泉』、『詩集』、『知恵の実』などで知られる一方で、青年時代のイェイツとの交友からも研究される。
4. ノッティンガムシャー出身。ケンブリッジを主席で卒業。聖公会の聖職者であった父の後を継ぐのを拒みニュージーランドに移住した。当地で牧羊業でした後、帰国。ダーウィンの進化論に対しては生涯批判的立場を貫いた。2作の代表作がある。『エレホン』(*Erewhon*, 1872) は匿名で発表されたユートピア小説。また、死後出版された『万人の道』(*The Way of All Flesh*, 1903) は自伝的作品である。
5. コクニー訛りでは、語頭の [h] を発音しないことがある。この場合は、バトラーが逆に相手のコクニー・アクセントをからかっている。
6. 父に象徴されるヴィクトリア朝的価値観を否定し、神に出会う悲願の道への試行錯誤を通して、バトラー自身の自己形成過程を描いた半自伝的小説。*The Way of All Flesh* (原題) は彼の死後出版〔1903年〕された。
7. Edmund Burke (1729-97): アイルランド出身の英国思想家。『フランス革命の省察』などの著書がある。
8. Francisco (José) de Goya (1746-1828) の絵画には心の闇、暗い衝動、狂気などを示すテーマが共通して見かけられる。人間性を重んじたバトラーと対極にある。
9. 15世紀ヴェネチアン・ルネッサンスの画家、Giovanni Bellini のこと。ラスキン は色彩に関する講義 (Slade Lecture, Oxford, 1870) で「ジョン・ベリーニに代表される絵画の頃を巨匠の時代とあえて言う。真にその名に値する時代であった」、と述べている。ラファエル前派はジョヴァンニ・ベリーニの影響を受けたとされる。19世紀後半の絵画の傾向を伝えている。
10. Charles Darwin (1809-82) による、*On the Origin of the Species* は1859年11月に出版された。
11. 風刺小説『エレホン』(*Erewhon*, 1872) の中で、ニュージーランドでの生活が反映されている。風景描写には画家の目を感じられる。
12. 道が定まらぬ自分の姿を羊と重ね合わせたことか。
13. 詩編147編10節に以下のような一節がある。

主は天を雲で覆い、大地のために雨を備え／山々に草を芽生えさせられる。
／獣や、鳥のたぐいが求めて鳴けば／食べ物をお与えになる。／／主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく／人の足の速さを望まれるのでもない。／主が望

まれるのは主を畏れる人／主の慈しみを待ち望む人。

14. Vittoria Colonna (1490-1547): ローマの貴族の娘。ミケランジェロと親交があった。
15. Walt Whitman (1819-92): “the catalogue man” とは、カタログの手法で、目に見えるものすべてを詠おうとした。
16. 郵便馬車: 郵便だけでなく、乗合馬車としての役割を担った。馬車の中に4人の乗客が乗れたが、後には馬車の外側にも乗るのが許可された。アイルランドでは、1789年に始まった。1840年代、50年代に徐々に鉄道に代わっていった。
17. Cornelius Nepos (B.C.100-B.C.25): 共和制ローマの伝記作家。『英雄伝』を書く。平易なラテン語のため、イギリスでは入門的な教育に使われた。
18. William Pitt, 1st Earl of Chatham (1708-78): 18世紀の政治家、首相、任1766-68。
19. 「三つ子の魂百まで」 William Wordsworth (1770-1850), ‘My Heart Leaps Up’
20. 「メリー・イングランド」: 昔からの呼称で産業・都市が発達する前を懐かしむこと。
21. Arthur Symonds (1865-1945): 詩人、批評家、象徴主義運動の指導者として知られる。息子のイエイツと親交があった。彼はイエイツと1899年にアラン島を訪ねた。
22. George Bernard Shaw (1856-1950): アイルランド出身の劇作家、劇評家。

翻訳には以下のテキストを利用した。

John Butler Yeats: *Essays: Irish and American*. Dublin: Talbot; New York: Macmillan, 1918.